



遥かな国の冒険譚

大道芸人の賭け

雪村月路

治安のよい、にぎやかな街だ。天気もいい。遊びに出るなというほうが無理な話で、金髪の王子は例によって、ルークと名乗って見物に出かけることにした。

「ぼくも行く」

と、セレンが、月色の長い髪を束ねながら付いて来る。どうせ、美女を見つけるまでの間だけに決まっているのだが。

ふたりで大通りを歩いていくと、やがて噴水のある大きな広場に出た。何か見世物をしているらしく、人だかりがしている。

「何だろう？」

と、ルークが言うと、彼より少し背の高いセレンには何かが見えたらしく、

「ナイフ投げ、かな？」

「へえ！」

ルークの青い瞳がきらめいた。ナイフ投げなら、ルークにも心得がある。実のところ、専用の小ぶりのナイフを常に10本持ち歩いているくらい、お気に入りの趣味なのだ。

「俺より上手かどうか、見て来る」

「はいはい、ご随意に。ぼくは興味ないから」

と、セレンは早くも別行動になった。

ルークが、するりと人ごみに潜りこんでみると、ナイフ投げの芸人は、最後の見世物を始めたところだった。見たところ、ルークより一回り年上で、髭を短く刈り込んだ、栗色の髪の男だ。パン、パン、と手を叩き、男は良く通る声で口上を述べた。

「さあさ、お立合い！ はやぶさテッドの最後の出し物だよ！ これなる女性は、我が最愛の妻、メリーアン。彼女が、なんと！ ナイフの的に、はりつけになってしまうのだ！

10本のナイフが少しでも逸れれば、愛しい妻を傷つけてしまう。どうする、テッド！

もちろん、髪一筋だって傷つけやしないさ！ とくにご覧あれ！」

愛らしい顔立ちの、小柄な女性が、観衆に向けてお辞儀をしてから、ナイフの的に向かって歩いて行った。的となっている板は、ちょうど人ひとりくらいの大きさだ。女性は、自分で目隠しの布をつけ、ぴったりと板に背中を合わせて、はりつけの姿勢になった。

「いつでもいいわ、テッド！」

「よし。では、1本目！」

ひゅん、と風を切って飛んだナイフは、タンツと小気味よい音を立てて、メリーアンの左耳の横に突き立った。おお、と観衆がどよめいた。

「2本目！ 3本目！ 4本目！ 5本目！」

タンツ、タンツ、タンツ、タンツ。メリーアンの肩、手首、腰、膝をかすめるように、ナイフは正確に板に突き刺さり、ビーンと震えている。観衆は息をのんで見守った。

「あと5本！ 6本目、7本目、8本目、9本目、――さあ、これで10本目だ！」

タンツ、タンツ、タンツ、タンツ、タンツ！ メリーアンの反対側をかすめるように、膝、腰、手首、肩、最後は右耳の横！ 口上通り、ナイフ使いは、髪一筋として妻を傷つけることはなかった。

はやぶさテッドは、ナイフに囲まれた妻に向かって歩いて行き、10本のナイフを引き抜いてから、妻の目隠しを外した。メリーアンは嬉しそうに笑って、夫に抱きつき、髭だらけの頬にキスをした。それから二人は、観衆に向かって、深々と一礼した。

「以上、はやぶさテッドのナイフ投げでございました！ お代はそちらの帽子の中へ！」

観衆は、惜しめない拍手を送った。チャリン、チャリンと、帽子は見る間に硬貨でいっぱいになった。

見物の客が散り散りになってから、ルークは、後片付けをしているナイフ使いに陽気な声をかけた。

「はやぶさテッド、あんたは凄いな！ きっと、あんたが狙ったら、針一本分だつて的を外すことは無いんだろうな」

「はは、そりゃあ、これで飯を食ってるからな」

テッドは振り返り、気さくに笑った。ルークは興味津々に、
「俺はルークっていうんだ。なあテッド、俺が投げるのを見てくれないか？ 10本投げると2本くらい外すんだけどさ、何が悪いのか、自分だと分かんないんだ」
「帽子に代金、入れてくれたか？」

「もちろん」

「じゃ、もっかい、的をここに置くから、ちょっと投げてみな」

木の板を置いて後ろにさがったテッドは、金髪の若者がナイフを10本取り出すのを見て、「ほほう」と言った。ルークは右手で、1本ずつ丁寧に投げた。

タンツ。タンツ。タンツ。ガチツ。タンツ。

タンツ。ガチツ。タンツ。タンツ。タンツ。

「ほら、2本、刺さらなかっただろ？」

「きれいに投げるなあ。ルークは筋がいい」

はやぶさテッドは、まず褒めた。それから、腕を組み、あごをなでて、
「そうだな、たぶん、ほんのちよつとだけ、手を離すのが早いんだな」

「そうかな」

「ほんのちよつぴりの差なんだ。もう一度、やってみな」

回収してもらったナイフを受け取って、ルークはもう一度投げてみる。

タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。

タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。タンツ！

「ほんとだ！」

「な、そういうことだ。にしても、大したもんだよ、ルーク。10本、ほとんど同じところに刺さってるじゃないか」

「いや、だいぶずれてるよ。テッドほど正確に狙えない」

二人が意気投合して喋っていると、役人の服を着た年配の男がやって来た。

「おお、はやぶさテッド、まだここにいたな」

「何ですか、お役人さん。俺は何にも悪いことは」

警戒するテッドに、

「うんうん、おまえさんに耳寄りな話を持って来た。領主様が、あんたの芸を見たいそう
だ。明日の昼、お屋敷の庭で披露すれば、金貨10枚くださるそうぞ」

ひゅうっとルークが口笛を吹いた。テッドの背中をどんと叩いて、

「凄いな、テッド！」

「お、おう。おうよ！」

テッドは緊張しながら、胸を張った。妻のメリーアンが嬉しそうに頷いているのを見

ながら、自分も頷いて、

「そのお話、お受けします！ 領主様に、よろしくお伝えください！」

大きな声で答えて、晴れやかな笑顔になった。役人も笑って、
「じゃあ、明日の昼に、迎えに来るからな。わしも楽しみだ」

そう言って、去った。

そして、翌日。

街は朝から、はやぶさテッドの話題で持ち切りだった。望むなら誰でも、街外れにある領主の館を訪れて、テッドの素晴らしいナイフさばきを見物して良いと、おふれが出されていた。前日にテッドの技を見た者たちが、口をそろえてテッドの腕前を誉めそやし、お祭り気分を盛り上げたから、たいていの者は「ちょっと見に行ってみようか」という気持ちになっていた。

昼になり、テッドとその妻のメリーアンが迎えの馬車に乗って館に到着したときには、すでに、広い庭は準備万端だった。しかるべき場所にナイフ投げの的がしつらえられ、見晴らしの良い場所には領主の席が設けられ、その反対側にはロープが張られて、見物客がわらわらと詰めかけていた。警備の役人も動員されている。

テッドとメリーアンが姿を現すと、観衆は喜んで、思い思いに、「がんばれよ」「しっかりね」などと声をかけた。テッドは緊張していたが、歓声に力づけられ、ふと、ルークの応援が聞こえた気がして、観客席を振り返った。思い思いに手を振っている観衆の中にルークを見分けることは出来なかったが、心強く感じて、テッドは観衆に手を振り返し、「よしっ」と自分に気合いを入れた。

そうして、はやぶさテッドの公演は、とてもうまく行った。ナイフ5本を次々に投げあげては受け止めるジャグリング。遠くで燃えているロウソクにナイフを投げつけ、火を消してみせる技。後ろ向きにナイフを投げる技、ジャンプしながらナイフを投げる技、同時に3本を投げて的に当てる技……。

最後に、メリーアンを的の前に立たせ、体すれすれに10本のナイフを投げつける大技が、今日も見事に決まった。領主も役人も観衆も、ナイフ使いとその妻に、惜しみない拍手と喝采を贈った。

領主は拍手しながら立ち上がった。芸人夫婦が頬を上気させてお辞儀をすると、「すばらしい技だった、はやぶさテッド！ 約束の褒美を取らせよう。だが、その前に」と、領主は言って、役人に合図した。役人は、ナイフ投げの的となった板を片付け、それよりも距離の遠い場所に、人の頭ひとつぶんほどの大きさの的を設置した。領主はうなずいて、言葉を続けた。

「さて、テッド。あの的は、さきほどの的より、小さく、遠い。ナイフ10本を投げ、全て当てることが出来たなら、約束の金貨10枚に加え、さらに100枚を褒美を取らせよう。ただし、1本でも的を外したら、100枚はもとより、始めの金貨10枚も、なかったことにする。どうだ、挑戦するかね？」

観衆がざわざわした。金貨100枚あれば、1年間、遊んで暮らせる。テッドは新しい的の大きさと距離を、真剣に目で測った。……いける。

「喜んで、挑戦させていただきます」

観衆の中から、聞き覚えのある声が「がんばれよ！」と声をかけてくれた。テッドはう

なずいて、ナイフを構えた。集中して、狙いを定め、投げた。

タンツ、タンツ、タンツ、タンツ、タンツ、
タンツ、タンツ、タンツ、タンツ、タンツ！

「ほう、これは見事、見事！」

領主は手を叩いた。観衆もどよめいて、手を叩いた。口々にテッドの技を褒め称える人々は、少しばかりテッドのことをうらやんでいる様子でもあったが、褒賞が金貨100枚とあっては仕方のないことだろう。

「では、約束どおり、金貨100枚を追加しよう。だが、その前に」

と、領主は言った。合図された役人たちは、ナイフの的を撤収し、さらに離れた場所に、人の手のひらほどに小さな的を設置した。まさか――。

領主は、おもちゃを見つけた子供のように、楽しそうに言った。

「さあ、テッド、次の的はあれだ。あの的には、さしものそなたも歯が立つまい。しかし、もし、あの的に10本のナイフを当てることが出来たなら、褒美として・・・、ふうむ、そうだな・・・、よし、この街にそなたの屋敷を建ててやろう。そして、街の住民から10人の美女を選んで妾とし、20人の屈強な男を選んで奴隷とし、金貨1000枚を与えて住まわせてやろう。時々、私のために働いてもらえれば、それでいい。だが、1本でも外したら、それは全部、なかった話。今までの金貨110枚も全て没収だ。ははは、どうだ、挑戦するかね？」

その場にいた誰もが耳を疑ったため、会場は、しばし静かになった。テッドとメリーアンは、言われたことをよく理解できずに、ぼかんとしていた。

「テッド、それはだめだ！」

と、誰かが大きな声を出して、まず観衆が我に返り、騒然となった。10人の妾って、誰のことよ？ 20人の奴隷って、誰のことだ？ 金貨1000枚って、それは、あたしたちが、俺たちが、額に汗した稼ぎの中から支払った税金じゃないか？

立ち尽くすテッドの頭の中を、言葉がぐるぐると回っていた。「金貨1000枚。金貨1000枚。金貨1000枚・・・」

メリーアンが、不安そうに言った。

「あんた。もう、やめようよ」

「いや。俺は・・・やるぜ」

テッドは、遠くに見える小さな的を、穴があくほどに見つめた。俺の腕が試されているのだ。そして、俺なら、きっと、できる！

「やらせてください、領主様」

「ほほう！ そう来なくてはな！」

領主は、嬉しそうに手をもんだ。テッドはナイフを構え、集中した。

「テッド、よせ！」

観衆の中から誰かが叫んでいたが、気にしなかった。遠い小さな的に向かって、ナイフを10本、投げた。

タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。

タンツ。タンツ。タンツ。タンツ。・・・タンツ！

ナイフは、素晴らしい技量によって、すべての的に当たった。テッドは身動きせずに、その的をじっと見つめた。夢じゃないよな？ 夢じゃないよな？ 夢じゃ・・・。

「ほう、ほう、ほう！」

領主は手をたたき、目を細めた。

「それでは、待たせたが、約束どおり——」

「待ってください！ そんなの、俺にだってできます！」

観衆の中から、一人の若者が進み出た。陽光のような金髪に、青い瞳が印象的な、美しい若者だった。

「俺にも同じことができるって証明したら、俺は何ももらわなくていいから、はやぶさテッドへの褒美を取り消してください」

テッドは裏切られた気持ちになって、腹を立てて言った。

「ルーク。どうして俺の邪魔をする。そもそも、おまえさんにや、あれは無理だ」

「テッド、俺だって争いたくはない。褒美を辞退してくれ」

「俺がこの腕でつかんだ幸運を、手放せというのか？ 何をたくらんでいやがる。金貨1000枚は、もう俺のもんだ！」

「じゃあ、こういうのはどうだい、テッド。10人の妾と20人の奴隷を辞退して、あんたが屋敷を建ててもらったあと、普通に使用人を募ればいいんじゃないか？」

「だめだ、だめだ！ 俺は何ひとつ辞退なんかしないぞ。全部、俺がこの腕で手に入れたんだ。全部、この俺のものだ！」

「そうか」

ルークはナイフ10本を取り出した。1本を右手に持って、2、3回、投げあげては受け止めるのを繰り返したあと、

「仕方ないな」

その1本を高く投げあげ、残りの9本を右手に移し、落ちて来たナイフを左手で受け止めた。

「領主様、投げていいですか」

「ふむ、やってみるがいい。そなたが成功したら、テッドへの褒美は取りやめよう」

「1本だって当たるものか」

テッドの罵り声を聞き流し、ルークは的に向かい、ナイフを構えた——昨日とは違い、左手で。

左手？ と、テッドが思ったときには、既に1本目のナイフが放たれており——

—— タ、タ、タ、タ、タ、

タ、タ、タ、タ、タンッ！ ——

あっというまの出来事だった。テッドは目を疑った。ルークの放ったナイフは、さっきテッドが当てたナイフをよけながら、10本とも、あの小さな的に突き刺さっていた。

観衆が、どよめいた。自然に、拍手と、歓声が湧き起こった。

領主も、驚いたようだった。

「これはこれは。して、本当にそなたは、何もいらぬのか？」

「いりません」

「わしのために、働いてみないか？」

「旅の身ゆえ、お許しを」

「そうか、残念だ。では、この二人に拍手を！」

観衆は拍手した。領主は立ち上がった。テッドははっと我に返った。

「お待ちください、領主様。それでは私は・・・」

「うむ？ 褒美を取りやめる、と、そう言わなかったか」

「・・・！」

「しかし、まあ、この若者が何もいらぬと言うなら、金貨110枚は、そなたにくれてやろう」

領主が役人に合図をすると、役人はテッドに、ずしりと重い皮袋をくれた。テッドは皮袋を開けて、金貨の数を数えた。ちょうど110枚あった。

ほっとして顔を上げると、もう領主の姿はなく、ルークの姿もなく、観衆はぞろぞろと引き上げて行くところで、傍らのメリーアンが泣き笑いしていた。

「おつかれさま、あんた。あたしは、これで良かったんだと思うよ」

テッドは、街を発つことにした。メリーアンと一緒に門に向かう途中、偶然、ルークとすれ違った。ルークは、ちらりとテッドを見たが、知らん顔だった。それで、テッドも複雑な思いで目をそらした。

道端にいた誰かが、「ごらん、はやぶさテッドだよ」と言った。

「ああ、あなたが、はやぶさテッドさん？ もう発つのですか」

呼ばれて、テッドがためらいながら振り返ると、声の主は、長い金色の髪をした、背の高い若者だった。

「ルーク、挨拶くらいしないのか？ 君、右手でもナイフが投げられるようになったって、あんなに喜んでいたじゃない」

行き過ぎかけていたルークが、「ああ、そうだっけ」と言いながら戻って来た。テッドを見た青い瞳に、少しだけ、親しさが戻っていた。

「ありがとな、テッド。元気で」

「・・・うん。ルークも、元気で」

「あたしからも。ルーク、ありがとう」

メリーアンが言った。ルークは、テッドを見て、メリーアンを見て、にこ、と笑った。テッドとメリーアンも、笑った。

じゃあ、と、手を上げて、彼らは別れた。気が付いてみると、テッドの胸は、不思議とすがすがしかった。

「よーし、俺も、もっともっと腕を上げてやるぞ」

と、テッドは口に出して言った。胸の中に、ルークの投げたナイフのリズムが刻み込まれていた。あれを越えてやるんだ。

—— タ、タ、タ、タ、タ、

タ、タ、タ、タ、タンッ！ ——

(完)

遥かな国の冒険譚
大道芸人の賭け

<http://p.booklog.jp/book/109562>

著者: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/blog/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109562>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109562>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブクログ